

退廃的、悲観的な言動の裏にある 中国の若者の漂流

—「仏系」、「内巻」、「躺平」を視点にした「喪文化」の考察—

YAN Linying

1978 年に開催された中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議は、中国青年の意識と精神状態を大きく解放させた。青年たちは率先して人生の価値と意義を改めて考え始めた。その後、改革と開放政策の影響によって、西欧諸国との文化交流がより深く、より広範囲になったことで、若い人たちの心にも大きな影響を与えていた。特に 21 世紀に入って、インターネットの急速の発展と普及により、若者は世界と接触する機会が増え、若者価値観・意識も多様化していった。

要するに、若者集団の価値観・意識は、歴史のさまざまな段階で常に矛盾したパターンを示しており、特に 2000 年以降は顕著になっている。このことは、改革開放後の 40 年間に起こった歴史的変化に照らすことで、よく理解することができる。

2010 年以降、主流価値観は依然として強く、若者の価値観の形成に大きな影響を与えている。特に、主流価値観が推奨する文化的目標は、若者に大きなプレッシャーを与えてしまう。一方、社会構造の複雑で絶え間ない変容などの外部環境の変化は、若者の生活や仕事にさらなる不確実性をもたらし、彼らの心をさらなる揺らがせている。

2016 年、「葛优躺(寝そべる葛優)」という画像は若者集団の中で、一気に人気を呼び、2016 年の十大流行語になっていた。「私は、そもそも廢人なのだ」という「喪」のイメージが溢れる画像が、若者の間に直ちに人気を集め、新しい若者意識としての「喪文化」の代表的な表現形式となったと考えられる。「葛优躺」のほか、「仏系青年」(2017)、「内巻・反内巻」(2020)、「躺平(寝そべり)主義」(2021)などの「喪」の気持ちを溢れる言葉が現れ、流行している。すなわち、「喪文化」は単一の流行語や出来事を指すことではなく、若者の気抜けや迷いなどの退廃的で悲観的な感情を表現することの全体である。

多くの学者は、「喪文化」が時代によって表れた若者サブカルチャーと指摘しており、「喪文化」の出現と流行の原因をそれぞれ考察している。鄭(2019)の研究は、「喪文化」も、過去の若者意識の

変化と同じように、時代の変化に照らし、さらに考察する必要があると提示した。特にその後、2020年の「内卷(反内卷)」、2021年の「躺平」の出現により、「喪文化」は、若者意識の変化を反映する社会的な注目点と見なされるべきだと考えられる。

本稿は、覃、代(2022)の研究を参照し、「内卷」と、「仏系」と、「躺平」をより広い社会的な文脈に置き、より詳細に分類することで、3つの単語を連動して考え、定性調査により、若者の意識の変化を分析する。しかし、本研究では、覃、代(2022)の研究に欠けている、異なる状態に置かれた若者の具体的なプロフィールや、若者の態度が異なる状態の中に絶えず変容するダイナミックなプロセスについても、さらに踏み込んで調査を行う。

退廃的で悲観的な若者意識を反映する喪文化を考察するのが本稿の目的である。具体的には、近年中国における喪文化に関する社会現象「内卷」、「仏系」、「躺平」に着目し、マートンの緊張理論に基づいて、喪文化の背後にある若者たちが直面した文化的目標とそれを実現する制度的手段の間に生じた緊張状態を説明し、喪文化の発生メカニズムを解明する。また、「喪文化」が広がる中、絶えず変化している若者像を把握していきたいと思う。

本稿において、分析対象は中国の若年層(20代)である。インタビュー調査と文献調査を通じて、「喪」と「喪文化」に代表される若者意識を考察する。本稿の調査は、4つのインタビュー調査と1つのデータ分析で構成しており、マートンの「緊張理論」に参照して作った「喪文化」モデルを検証した。

退廃意識を代表する喪文化はネットから発祥するサブカルチャーであり、中国の主流文化とはまだ距離が存在する。しかし、本稿を通じて、以下のことが判明した:①「喪文化」は常に洗練され、新たな意味を生み、その性質は質的に変化している。純粹でネガティブな言動から、複雑な集団意識、新世代の若者意識へと発展している。②「喪文化」を代表する若者意識は、常に矛盾していて、多様性と交差性を表現している。これも、中国における社会意識及び社会価値観が変化していることともつながっている。以上のことから、喪文化、特に喪文化の背後にある若者の言動を分析することは、中国における社会意識の研究に役立つといえるだろう。

最後、「喪文化」モデルによって、若者の態度・理念によって「喪」の気持ちを醸し出す原因を明らかにしたが、「喪文化」を全面的に理解するのはまだ不十分である。D・マツアの「漂流理論」も有力な説明・分析概念であると考えられる。「漂流理論」に基づいて、「喪文化」・若者意識の新しい変容の中での「逸脱」を注目してグラフを新しく設定してみた。これは、今後の課題としてさらなる検討が必要だろう。